

恩寵のバーガンデイ

平瀬たかのり

主な登場人物

- 杉原陽鞠（ひまり）（17）高校二年生
- 杉原（日野）佳也子（66・22）（23）陽鞠の祖母・料理教室講師・元銀行員
- 春野寿道（としみち）（17）高校二年生・陽鞠のクラスメイト
- 高梨凜香（17）高校二年生・陽鞠の親友
- 村川彩美（17）右同
- 増山香里（22・23）佳也子の銀行員勤務時代の同僚・短大の同級生
- 岡崎美幸（22・23）右同
- 杉原仁一（24）佳也子の恋人・陽鞠の祖父
- 緑山勝次（29・30）バーテンダー・七星銀行東里支店人質事件犯人
- 丸川梨乃（32）大阪市立図書館司書
- 奥村（39）美容院「サマルカンド」店长
- 田所（65）日本史講師
- 岡島瑤子（48）生徒指導担当教諭
- 前田（17）陽鞠の同級生・男子バスケットボール部員
- 神保（55）酒問屋社長

○七星銀行東里支店・店内

ヘテロップⅡ（以下T）1979年1月26日
営業中の店内。二十名ほどの客。

○支店前の道路

停まるライトバン。乗車席から降りるチロリアンハット、サングラス、白マスクの男、緑山勝次（30）。ゴルフバッグを左肩がけ。右手に大きなバッグを持って支店内へ駆け足で入っていく。

○七星銀行東里支店・店内

緑山、手早くゴルフバッグから猟銃を取り出すと、天井に向けて二発発砲。行員、客の悲鳴。右手のバッグをカウンター内に投げ入れる緑山。パニックになる店内。

緑山「五千万や！ 早うバッグに入れえ！」

○画面

いちどきに暗くなって。

○美容院・サマルカンド・外景

瀟洒な店構えの美容院。

○前同・店内

店長・沖村（39）に、紫がかった赤い髪をカットしてもらっている杉原陽鞠（17）。

精算時。女性店員の隣に立ち、へ地毛
×
×
×
証明書を手に持って読み上げる沖村。
沖村「『当該生徒の毛髪において、髪染め、
脱色のなされていないことを、ここに証明
するものである』——はいはい、証明させ
ていただきますわ」

へ地毛証明書に店のハンコをつく沖
村。

沖村「陽鞠ちゃん」

陽鞠「なに」

沖村「ぼくは、陽鞠ちゃんのバーガンデイ、
めっちゃ綺麗や思ってるからな。パワー！」
中山さんに君のマネをしてポーズを
決める沖村。

陽鞠「なんでそんなに君なんよ」

沖村「最近ハマってるねん。毎晩動画見なが
ら酒飲んでる。ヤー！」

爆笑する陽鞠。

○杉原家・洗面室（朝）

鏡の前に立ち、櫛で髪を梳いている陽
鞠。

○前同・仏間（朝）

仏飯の乗った膳を持って入ってくる
陽鞠。仏壇には信士、信女が連名の位
牌と、居士の位牌。
仏飯三つを供える陽鞠。鈴を鳴らし手
を合わせる。

○前同・居間（朝）

テレビがある和室六畳の居間。
座卓で向かい合って朝食中の陽鞠と、
祖母の佳也子（67）。

佳也子「忘れんと持って行きや。地毛のやつ」
陽鞠「もうカバンに入れた」

佳也子「黒に染めてもろたらそんなもん出さ
んで済むんやろ」

陽鞠「またそれ言う。岡島といっしょのこと
なんか言わんといてえや。わたしはこの髪
が気に入ってんの。地毛があかんくて、黒
に染めたらなんにもなしやなんて、学校が
おかしいんや。ちがう？」

佳也子「それは、まあ、そやけどなあ」
陽鞠「『そやけど』なによ」

無言で味噌汁をすする佳也子。

陽鞠「ほんまに一回見たいんやけどな、わた
しといっしょの髪の毛のばあば」

佳也子「わたしは黒い髪が好きなんや」
陽鞠「分かってるけど」

食事を続ける二人。

○登校路（朝）

歩いている陽鞠。後ろから駆けてくる
高梨凛香（17）と村川彩美（17）。

凛香「ひーま、おっはよー」

彩美「お、髪切つとるやん、この女」

陽鞠の髪を跳ね上げる彩美。

陽鞠「ちよっと、気安う触らんといて」

彩美「んふふ、気安う触りたい」

凛香「わたしも」

凛香も陽鞠の髪を跳ね上げる。

陽鞠「もう、やめてえやあ」

嬉しそうな陽鞠。

○朔ヶ原高校・二階廊下（朝）

手を振りあう陽鞠と凜香、彩美。陽鞠、七組へ。凜香と彩美、五組へ入って行く。

○前同・二年七組（朝）

自席に座る陽鞠。隣の席で文庫本を読んでいる春野寿道（17）。

陽鞠「春野君、おはよう」

寿道、陽鞠を見て。

寿道「おはよう。あ、杉原さん髪切ったんや」

陽鞠「お、なかなかやね」

寿道「え？」

陽鞠「そういう事に気がついて、ちゃんと言

えるのはなかなかのもんやで」

寿道「ははっ、そうかな」

陽鞠「今日はなに読んでるのん？」

寿道、文庫本の表紙を陽鞠に見せる。

角川文庫、山際淳司著『スローカーブ

を、もう一球』である。

陽鞠「また野球の話し？」

寿道「うん」

陽鞠「この前もそんなん読んでたやんね。な

んやっつけたっけ、えっと——」

口を開きかける寿道。

陽鞠「待って！ 思いだすから！ えっと、

つと——そうや、ノンフィクション！」

寿道「当たり前」

陽鞠「やった！」

ガッツポーズをする陽鞠を微笑んで

見る寿道。

寿道「この本に収録されてる『江夏の21球』
っていう作品がとにかくすごいねん。そう
やな、これはスポーツノンフィクションの
古典って言うてええんやろうなあ」

陽鞠「古典——『春はあけぼの』的なの？」

ぷぷっと笑う寿道。

陽鞠「あ、今バカにした」

寿道「してへんよ」

陽鞠「いや、絶対バカにした」

寿道「うーん、でも確かにこれはほんまに『春
はあけぼの』かもしれないなあ。ぼくこれ、
昨日の夜初めて読んで、すぐ二回目読んで、
なんか寝られへんくて、夜中にもう一回読
んで、今四回目読んでるとこ」

陽鞠「四回目！ どんな話なん？」

寿道「1979年の広島対近鉄の日本シリー
ズ、優勝がかかった第七戦。江夏豊ってピ
ッチャーが九回裏に投げた21球につい
て書かれてるんや。プロアスリートの心技
体、その粋がたまった優勝が決まるラスト
イニングに江夏が投げた21球。それを山
際淳司さんが一球一球いろんな人に取材
して、調べて丹念に書いてる。すごい、こ
の作品はほんまにすごい」

熱く語る寿道をじっと見ている陽鞠。
寿道「あ、なに言うてるか分からへんやんね、
ごめん」

陽鞠「ううん、なんぼかは分かるで。わたし
中学校のときソフト部やったから。まあで
も春野君がその本にすごく感動したこと
ははっきり分かったわ」

寿道「——うん、そうなんや。感動したんや
ぼくは」

陽鞠「昨日から四回も読んでるくらいやもんな」

笑って頷く寿道。

寿道「ソフト部やってんね、杉原さん」

陽鞠「うん。公式戦で一回も勝ったことない
弱小ソフト部のサードの補欠」

寿道「高校入っても続けようって思わへんかったん？」

陽鞠「ヒーヒー汗かいて練習で走るのとか、
中学の時だけで十分。考えただけでゲー出
そうや」

寿道「そっか」
読書に戻る寿道。気づく陽鞠。

陽鞠「春野君」

寿道「ん？」
陽鞠を見る寿道。

陽鞠「今の、ごめん」

寿道「『今の』って？」

陽鞠「いや、だから——ごめん」

寿道「ぜんぜんかまへん、そんなん」

読書に戻る寿道をじっと見る陽鞠。

× × ×
日本史の授業中。講師の田所（65）
が教壇に立っている。

田所「えー、もうすぐ楽しい楽しい夏休みや。
そこでや、みんなには自由研究としてこう
いうことをやってみよう」

黒板に大きく「現代史研究1945」
2000」と書く田所。
生徒から「えー、問題集とかあるやん」

田所「めんどくさー」の声が上がる。
田所「なにがめんどくさいじゃ。あのな、問題集やるのも年号暗記するのもそら大切や。けどそんなもんはあくまでへお勉強へや。まあへお勉強へ教えるのがわしらの仕事やけどやな」

男子生徒 A が手を挙げる。

田所「なんや」

A「どんなことしたらええんですか」

田所「先の大戦終わった2000年までの出来事、世紀が終わった2000年までの出来事、人物、事件、なんでもええから調べてみるって言うとする。それこそがほんまのへ勉強へや。きみらのおじいさんやおばあさん、お父さんやお母さんが生まれ、青春を過ごした時代かて日本史の一部なんや。テーマは自由。現代史を自分の力で調べてノートにまとめる。それが日本史の自由研究課題や。テーマが決まったら言いにくい」

男子生徒 B「パソコンやスマホ使って調べてもええんですよね」

田所「これやから今のガキは——かまへん。今の時代それが当たり前やっていうことくらいわしも分かっている。けどな、一回は図書館に行ってみろ。きみらは本の、紙の手触りを知らなすぎる。自分のテーマについて、関連書籍を見つけて読んでみる。ええな。よっしゃ、マクラはここまで。一学期最後のへお勉強へはじめろぞお」

田所。板書の文字を黒板消しで消していく

×

×

×

チャイムが鳴り授業が終わる。教室を出る田所。椅子から立ち上がった寿道、田所を追うようにして教室を出る。その様子を見ている陽鞠。

○前同・廊下

寿道「田所先生」

田所「春野、どないした」

寿道「自由研究、ほんまになにがテーマでもええんですか」

田所「なにか調べたい事があるんか」

寿道「はい『江夏の21球』です」

田所「ほう。山際淳司さんやな」

寿道「読まれてるんですか、先生」

田所「もちろんや。あの試合テレビで視てたわ」

寿道「えっ、リアルタイムで視てはったんですか！」

田所「そうや。あれは大学四回の年や。貧乏学生やったから下宿にテレビなんかのうてな。金持ちの坊さんの子がツレに一人おったから、そいつの下宿に通いつめて全試合視た。わしな、近鉄ファンやったんや」

寿道「そうやったんですか」

○前同・二年七組

廊下側の窓際に立ち、語り合う寿道と田所を見ている陽鞠。

○前同・廊下

田所「体育の授業で提出した『清原和博への告白』の感想文も読ませてもろた。宗次先

生が『しつかり書けてます。感動しました。読んで下さいますか？』言うてな」

寿道「そうなんですか」

田所「原稿用紙で二十枚。たいした文章力や。好きなんか、スポーツノンフィクション」
寿道「はあ、ずっと小説ばかり読んできたんですけれど、鈴木忠平さんのあれ読んでから興味持ったっていうか」

田所「そんでからの『江夏の21球』か」
寿道「はい」

田所「元近鉄ファンとして楽しみにしてる、春野の『江夏の21球』——春野寿道君、きみは十分体育をやっとる。そしてきみには文筆の才がある。それを信じてたくさん調べて思いきり書いてみなさい」

寿道「はい。ありがとうございます」

田所「きみみたいな生徒、昔はもうちょっと去っていく田所」。

○前同・二年七組

戻ってくる寿道。自席に座る。

陽鞠「田所先生となに話してたん？」

寿道「見てたん？」

陽鞠「うん」

寿道「自由研究『江夏の21球』調べてもええかって訊いてたんや。田所先生、かまへんって」

陽鞠「そっか、よかったやん」

寿道「うん。他の教科の課題早い事終わらせて、納得いくもん書きたいわ」

上気している寿道の顔を見つめる陽

鞠。

○前同・運動場

1 体育の授業中の男子生徒たち。サッカーの試合が行われている。

○前同・二年七組

自席に座り、原稿用紙に向かって執筆をしている寿道。机には『スローカーブをもう一球』。原稿用紙に『江夏の21球』を調べるにあたってと記す寿道。

立ち上がる寿道。窓際に寄り、同級生たちの試合をしばらく見る。自席に戻り、執筆を始める寿道。

○さくらキツチンスクール・外景

奥まった通りにあるこじんまりとした料理教室。

○前同・教室内

十人ほどの生徒を前にして教壇に立っている佳也子。

佳也子「今日は鶏肉を使ったお料理にチャレンジしてみましよう。お肉の中でも安価で栄養価も高く健康面でも優れている鶏肉料理をたくさん覚えて、彼氏、旦那さんの胃袋をガツチリ掴んじやいませうね」
笑いのおきる教室。

○朔ヶ原高校・職員室内

自席に座っている生徒指導担当教諭

の
岡島瑤子（49）。その前に立っている陽鞠。陽鞠から渡された地毛証明書を手にしている瑤子。

瑤子「杉原さん」

陽鞠「はい」

瑤子「めんどくさいやろ、髪切るたびにこれ持って来るの。黒に染め。そしたらいちいちこんな出さんですむんやから」

陽鞠「絶対にいやです」

瑤子「強情な子やわ。艶やかな黒髪、それは日本人女性の淑やかな美しさを象徴する代表的なものよ。覚えておきなさい」

陽鞠「失礼します」
職員室を出ていく陽鞠。

○ 帰り道

並んで歩いている陽鞠、凜香、彩美。
陽鞠「あー、ホンマ岡島腹立つ！ なにが『艶

やかな黒髪、それは日本人女性の淑やかな美しさを象徴する代表的なものよ。覚えておきなさい』や、ボケえ！」

爆笑する凜香と彩美。

彩美「そっくりや」

凜香「完コピやし」

陽鞠「髪切って証明書出すたび言われるねん！ 覚えてしもうたわ！ そこだけ標準語なんも腹立つわ！」

凜香「まあそう怒らんと。で、陽鞠どうするんよ」

陽鞠「なにがよ」

凜香「なにがって前田君のことに決まってる

やろ」

●ヘインサート・朔ヶ原高校・体育館

男子バスケットボール部の部活動中。

紅白戦、小気味よくドリブルを続け、

フェイントで相手の部員をいなし、ス

リーポイントシュートを決める前田。

凛香「なんの不满があるんよ」

彩美「ほんまや。なに迷ってるのん」

陽鞠「うん——なあ、凛香は祐志くんのどこ

がよくって付き合おうって思ったん？」

凛香「わたし？ うーん、そやなあ。やっぱ

りわたしのが持ち大事にしてくれるとこ

ろがいちばんやったかなあ。大学生やから、

やっぱ大人やし。いっしょにいて安心感

あるっていうのも大きかったなあ」

彩美「のろけ大炸裂」

凛香「訊かれたから正直に答えただけやし」

陽鞠「そっか」

肩を並べて帰っていく三人。

○杉原家・佳也子の部屋（夜）

ベッドに横たわり、料理の本を読んで

いる佳也子。ドアがノックされる。

佳也子「入り」

入ってくる陽鞠。

陽鞠「先生やのに、本読むねんな」

佳也子「起き上がる佳也子。」

佳也子「一生勉強や」

佳也子「ベッドに並んで腰かける二人。」

陽鞠「——うん」

佳也子「つきあうの、不安か」

陽鞠「うん、まあ——好きや言うてくれたのは、悪い気せえへんけど」

佳也子「よう考え」

陽鞠「え」

佳也子を見る陽鞠。

佳也子「なんや」

陽鞠「いや、ちよつと意外やったから」

佳也子「背中押してほしかったんか」

陽鞠「それは、ちよつとあったかも。なあ、

ばあば」

佳也子「なんや」

陽鞠「ばあばは、じいじひとり？」

佳也子「え」

陽鞠「いや、そやから」

佳也子「——そや」

陽鞠「うん、やっぱりそうか」

佳也子の手を握る陽鞠。

○朔ヶ原高校・校門の前

前田「下校している陽鞠、凜香、彩美。」

前田「杉原さん」

後ろから声をかける前田。振り向く三人。

凜香「そしたら、うちらはこれで」

彩美「陽鞠、さいなら」

笑いながら去っていく二人。

陽鞠「あいつら……」

前田「いっしょに帰ろうや」

陽鞠「前田君、部活は？」

前田「顧問の南先生、研修とかで休みやねん。

そやから今日はオフや。いっしょに帰るのもあかんか？」

陽鞠「――べつに、ええけど」
前田「やった」
肩を並べて校門を出る二人。

○帰り道

前田「並んで歩いている陽鞠と前田。」

陽鞠「手え繫いで歩くのはあかんかな」

前田「それは、ちよつと」

前田「分かつて訊いてん」

笑う前田。

前田「杉原さん、つきあったこととかあるん？」

陽鞠「ないよ、そんなん」

前田「それも分かつて訊いた」

前田「俯きがちに歩いて行く陽鞠。」

前田「変なこと言うたかな、ごめん」

陽鞠「べつに――」

前田「杉原さん、日本史選択してる？」

陽鞠「え、あ、うん」

前田「田所先生の自由研究、どうするん？」

陽鞠「まだなんにも決めてない。前田くん

は？」

前田「俺もや。まあバスケのこととか適当に調べよっかなあって思ってるんやけど。あ

んなんめっちゃめんどいわ」

陽鞠「そう」

歩いて行く二人。

○杉原家・前

前田「向かい合っている陽鞠と前田。」

陽鞠「――うん」

前田「返事、いつでもええから」

陽鞠「うん」

前田「けど、夏休みの間にはほしいな。そんなで、杉原さんといっしょに海に行きたい」

陽鞠「海」

前田「うん。そしたら」

手を振る前田。陽鞠も小さく手を振り返す。去っていく前田の背中を見ている陽鞠。玄関扉を開けて家へ。

○前同・台所

佳也子が料理をしている。そこへ入ってくる陽鞠。

佳也子「おかえり」

陽鞠「ただいま。早いやん——あ、今日は午前だけの日か」

冷蔵庫を開け、麦茶のボトルを取り出しコップに入れて一気飲みする陽鞠。

陽鞠「はあ……」

佳也子「なんや、お疲れ気味やな」

陽鞠「せやねん。ちょっと部屋で横になるわ」

佳也子「今日は鶏スペシャルやで。教えるついでに準備してきた」

陽鞠「そっか、ありがとう」
台所を出ていく陽鞠。料理を続ける佳也子。

○前同・陽鞠の部屋

スマホを軽くベッドの上に放り投げる陽鞠。ベッドの上に身を投げ出し、うつぶせになる。

陽鞠「自由研究のこととか、めんどいんやつ

たら、無理に話さへんかてええやん……」
枕を抱きしめ、ベッドの上でゴロゴロ
転がる陽鞠。やがてじっとする。

陽鞠「風呂でも入ろ」
立ち上がる陽鞠。

○前同・居間（夜）

座卓の前、パジャマ姿で座っている陽鞠。卓には、から揚げ、胸肉のハム、砂肝とピーマン炒め、ササミと野菜のサラダ、肝の甘煮、セセリの串焼きなどが、ふんだんに。

満足そうに食べている陽鞠。

陽鞠「けど、から揚げだけは、もうちよいパ
ンチがほしいんよなあ」

胡椒の瓶を手に取り振りかける陽鞠。
口に運ぶ。頷きながら咀嚼する。

つけていたテレビから、パトカーのサ
イレン音。テレビを視る陽鞠。

画面に映る番組タイトル《ザ・リア
ル！ 実録20世紀事件史》。

画面の中、司会者のタレントが直立し
て一礼する。

タレント「へこんばんは。この時間は報道特
番《ザ・リアル！ 実録20世紀事件史》
をお届けします。まず最初に採り上げるの
は1979年1月に起こった七星銀行東
里支店人質事件です。この事件は、猟銃を
持った男が、銀行を襲撃、駆け付けた警官
二名と行員二人を射殺した後、銀行員と店
内にいた客、約四十名を人質に籠城。立て
こもりは四十二時間にも及び、最終的に事

件は突入した警察の特殊部隊が犯人を狙撃。犯人死亡という形で終結します。この衝撃的な事件が現代に伝えるものはなにか。詳細な再現ドラマによってお届けいたします。」

画面をじっと見つめる陽鞠。

×

×

×

風呂から上がり、居間に入ってくる佳也子。

佳也子「あー、ええお湯やった。どないや陽鞠、おいしい？ から揚げ、ちゃんと下味つけてるんやから胡椒ふったらあかんで」
陽鞠「うん」

陽鞠の見つめているテレビ画面、再現ドラマが映し出されている。

ナレーション「へそして犯人、緑山勝次は四人を殺害した後、支店長席に座ると、自分を守るように女性行員十八人をカウンターの上に座らせた。己を守る人間の盾にしたのである。」

画面の中、制服姿でカウンターに座らされている女性行員たち。

陽鞠の後ろで棒立ちになり、テレビ画面を視ている佳也子。

佳也子「陽鞠」

陽鞠「ん？」

振り返る陽鞠。

陽鞠「どないしたん、ばあば。顔真っ青やで」
佳也子「テレビ替えて」

陽鞠「いや、わたし今これ視てるんやけど」
佳也子「替えてって」

陽鞠「あの、なんで——」

佳也子「替えてって言うてるやん！　言うこと
ときかんかいな！」

突然の剣幕に驚く陽鞠。

陽鞠「ばあば——」

佳也子、我に返り。

佳也子「嫌いなんよ、そんなほんまにあった
事件のドラマなんか、気持ち悪うて視てら
れへんの」

陽鞠「うん。分かった」

リモコンを手にしてチャンネルを替
える陽鞠。

佳也子「ごめんな、大きい声出したりして」
陽鞠「ううん、なんにも」

座り、食事を始める佳也子を見つめる
陽鞠。

○前同・台所（真夜中）

シンクの前で水がぶ飲みしている
陽鞠。

陽鞠「パンチきかせすぎた……ばあばの言う
こときくんやったな」

二杯目の水を飲む陽鞠。

○前同・佳也子の部屋（真夜中）

ベッドの上で眠っている佳也子。

●佳也子の夢

居間で人質事件のテレビを視ている
陽鞠の後ろ姿。

佳也子「へ替えなさい陽鞠！」

振り向く陽鞠——銀行襲撃犯、緑山勝
次に変わっている。立ち上がる緑山。

緑山「へどないしたんや、髪の色変わってし

もうてるやないか」

佳也子の髪を触ろうとする緑山。動けない佳也子。

佳也子「うわああっ！」
佳也子、悲鳴をあげて起き上がる。

○前同・佳也子の部屋の前の廊下（真夜中）

佳也子の部屋の前を通り過ぎようとしていた陽鞠だったが、突然の佳也子の悲鳴に驚く。慌てて部屋のドアを開ける。

陽鞠「どないしたん、ばあばっ！」

○前同。佳也子の部屋（真夜中）

上半身を起き上がらせ、顔を覆っている佳也子。

佳也子「なんでもない。ちよつと、変な夢みてしもうてな。大丈夫や」

陽鞠「――ほんまに大丈夫？」
顔を上げ陽鞠を見る佳也子。

佳也子「大丈夫や。陽鞠、コップに水一杯汲んできてくれるか」
陽鞠「うん、分かった」

部屋を出る陽鞠。また両手で顔を覆う佳也子。

○朔ヶ原高校・二年七組・教室

チャイムが鳴り、帰宅の用意をして椅子から立ち上がる陽鞠。大きなため息をつく。

寿道「どないしたん杉原さん」
陽鞠「え？」

寿道「今日朝からため息ばかりやで」

陽鞠「そうなん？」

寿道「自覚なかったんや」

コクンと頷く陽鞠。

寿道「恋の悩み？」

陽鞠「え？」

寿道「ぼく、ちっさい時から入退院くりかえしてたやろ。そやから知ってるねん。女の看護師さんがハァハァため息つくときはたいがい恋の悩みやねん。よう聞かされたわ『なあトシ君、聞いてくれる』いうて」

陽鞠「そっかあ。それだけやないねんけどな」

寿道「それだけやないんや」

陽鞠「うん——そうや、なあ春野君。わたしの話しも聞いてくれる。看護師さんらみたいにやあ」

寿道「ええよ。聞かされ顔してるんかな、ぼく」

陽鞠「いや、聞かされ顔って」
笑う二人。

○前同・情報処理室・室内

パソコンの置かれた机が並べられて
いる情報処理室。隣どうしの席に座っ
ている陽鞠と寿道。

寿道「前田君との事はなにもよう言わんわ。
杉原さんがつきあいたいって思ったらつ
きあったらええって思うし、つきあいたく
ないって思うんやったら断ったらええと
思う」

陽鞠「——なにも言うてへんのとっしよや
ん、それ」

寿道「ごめん」

陽鞠「謝らんでもええよ。やっぱりこんな人は人からアドバイスもらって決めること

やないし。もうちよつと考えてみるわ」

寿道「うん。で、おばあさんの方やけど」

陽鞠「うん」

寿道「ぼく昨日その番組視てへんねん。どこ

の銀行やったっけ」

陽鞠「確か、七星銀行やったと思う」

寿道「スマホで調べようとかは思わへんかった？」

陽鞠「思ったけど、なんか怖あて」

寿道「うん、分かった」

陽鞠「パソコンに向かい検索を始める寿道。

寿道「へ七星銀行東里支店人質事件」これやな」

パソコンの画面を見つめ、スクロールしながら表示されている文言を読み始める寿道。

陽鞠「春野君」

寿道「ごめん、ちよつと」

陽鞠「うん」

寿道の横顔をじつと見ている陽鞠。やがて寿道、画面を見つめたまま。

寿道「杉原さん、その番組どこまで視たん」

陽鞠「え、そやから犯人が駆け付けた警官二人と銀行員二人殺して、銀行の女の人が犯人の周りに座らされるところまでやけど」

寿道「銀行の服着てた？」

陽鞠「え？」

寿道「再現ドラマで犯人の周りに座らされて

た女性行員役の人ら、銀行の服着てた？」
陽鞠「そら、着てたよ」

寿道「——そやろなあ、夜の七時台にそんな
ん放送するの無理やもんなあ。杉原さん」

寿道、陽鞠を見る。

陽鞠「なによ」

寿道「実際はな、銀行の女の人ら全裸にされ
てる。犯人の緑山に命令されて」

陽鞠「ええっ！ なによそれ」

寿道「再現ドラマで銀行の服着たままやった
のは放送上の演出や」

陽鞠「そんな、全裸って……」

寿道「事實はそうやつたんや。それ視ておば
あさん変になつたん？」

陽鞠「うん」

寿道「すごい、おかしかった？」

陽鞠「うん。わたしばあばに大きい声出され
たんなんか初めてや。それに、夜中に叫び
声上げて飛び起きたんかて——」

寿道「そうか。杉原さん。これ以上関心持た
んでええんちゃう、この事件」

陽鞠「どういうことよ」
寿道「誰にかて、知られたくないことってあ
るよ」

陽鞠「言うてよ」

寿道「え」

陽鞠「今度はちゃんと言うてよ。春野君が今
思ってること。あるやろ」

寿道「——人質の一人やつたんやないやろか、
杉原さんのおばあさん」

陽鞠「ばあばが、人質——」

○前同・職員室前廊下

職員室扉近くの壁際に立っている寿道。礼をして出てくる陽鞠。向かいあう二人。

寿道「田所先生、なんて？」

陽鞠「うん、あの事件のこと調べてもええって」

寿道「そっか。あの事件の人質やったと思う？ 杉原さんのおばあさん」

頷く陽鞠。

陽鞠「わたし、知りたい。わたしの知らへんばあばのこと、わたし知りたいんや」

肩を並べて歩き出す二人。

寿道「なんでそこまで思うん？」

陽鞠「ばあばのことが好きやから。ほんまにほんまに好きやから」

寿道「好きやから」

陽鞠「うん。この赤い髪な、ばあばからの遺伝。死んだお母さんは飛ばして、わたしに出てんよ、このバーガンディ」

寿道「え」

陽鞠「わたしが小三のとき、じいじが臍臓の病気で入院してたんよ。退院する日にお父さんとお母さんが車で迎えに行つてんけどな。その帰りに信号無視してきた車にぶつけられて三人とも死んでしもうたんよ。それからは、ばあばとずっと二人で暮らしてる」

しばらく無言の寿道。

寿道「バーガンディっていうんやな、その色」
陽鞠「うん。一代飛ばして出てるんや。そこから、ばあばのお母さん、わたしのひいば

あばは黒髪。ひいひいばあばは、バーガン
デイやっつてんて」

寿道「へえ」

陽鞠「けど、ばあばはずっと黒に染めてる」

寿道「そうなん？」

陽鞠「うん。地毛の色好きやないんやて。な
んで知ららんけど。一回見てみたいんやけ
どな、バーガンデイのばあば」
歩いて行く二人。

○前同・校門前

校門前まで歩いてくる陽鞠と寿道。

寿道、陽鞠の少し後ろを歩いている。
振り返り寿道を見る陽鞠。

寿道「え？」

陽鞠「いや」

また歩き出す二人。

○前同・校門を出たところ

寿道「そしたら、これで」

陽鞠「うん——春野君」

寿道「夏休み入ったら、わたし一週間くらい
で全部の課題、ガーツて終わらせるから、
日本史の自由研究手伝ってくれへん？」

寿道「え？」

陽鞠「春野君、なんかそういうの得意そうや
し。図書館とか行くんやろ。江夏のナント
カのノンフィクション調べるのに」

寿道「うん。市立図書館から近いから子供
のころからずっと通ってるし」

陽鞠「そっか。それやったら、やつぱりわた
しの調べたこととか書いたこととか、チエ

○杉原家・玄関（朝）

ナツプザツクを背負い、私服で出かけ
ようとしている陽鞠。見送っている佳
也子。

佳也子「あんたが図書館行くやなんてなあ」

陽鞠「なによ」

佳也子「大雨降らんかったらええけど」

陽鞠「うるさいなあ。頼りになる相棒いてる

から大丈夫なんや」

佳也子「お昼はほんまにええんやな」

陽鞠「うん。コンビニでなんか買うから。そ
したら行ってきまーす」

玄関を出る陽鞠。

○路上（朝）

陽鞠モノログ（以下・M）「ごめんな、ば
あば。わたしたぶん、ばあばが知られたあ
ないこと調べるんよ、今から」

歩いて行く陽鞠。

○大阪市立中央図書館・エントランス（朝）

立っている寿道。

陽鞠「春野君、お待たせ」

寿道「ぼくも今来たところから」

陽鞠「あー、なんかドキドキする」

寿道「え、なんで？」

陽鞠「図書館なんか入るの初めてやもん」

プツと笑う寿道。

陽鞠「あ、今バカにしたやろ」

寿道「してへんよ」

陽鞠「いーや、絶対バカにした」
図書館へ入って行く二人。

○前同・一階フロア（朝）
陽鞠「うわあ、本だらけや」
寿道「そら図書館やもん。ここだけちゃうで。
二階も三階も本だらけやで」
貸し出しカウンターへ向かう寿道。つ
いて行く陽鞠。

○前同・貸し出しカウンター
寿道、座っている司書の丸川梨乃（3
2）に。

寿道「丸川さん、新聞の縮刷版を閲覧したい
んやけど」

梨乃「何年何月のやつ？」

寿道「だいぶ古いんやけど、1979年の十
月と十一月。とりあえず今日は朝日と読売。
ある？」

梨乃「ここをどこやと思ってるのよ。なにか
調べもの？」

寿道「うん。日本史の自由研究」

梨乃、陽鞠を見る。

梨乃「お友達？」

寿道「え、あ、うん。いっしょのクラスの杉
原さん。テーマ違うけど、ここでいっしょ
に調べよかって」

会釈する陽鞠。

寿道「ほら、杉原さんも」

陽鞠「あ、わたしも、えっと——」

寿道「同じ年や」

陽鞠「あ、そや。わたしも同じ1979年の
一月の縮刷版を見たいです」
寿道「二月のも見た方がええんちゃう」

陽鞠「え」
寿道「事件があつたのつて一月の末やろ。二月の新聞にもその後の経過とかいっばい載ってる思うで」

陽鞠「そつか。じゃあ二月のもお願いします」
梨乃「1979年の一月、二月、十月、十一月の朝日、読売の縮刷版やね。ちよつと待ってな」

立ち上がり書庫へ向かう梨乃。

陽鞠「めっちゃフレンドリー」

寿道「そら小学生からのつきあいやもん」

陽鞠「やっぱりいっしょにきてもらつてよかった。頼りになるわあ」
照れくさげに笑う寿道。

○前同・一階フロア（朝）

陽鞠「縮刷版四冊を抱え歩いて行く二人。」

陽鞠「けっこう、重い……」

寿道、途中で止まり大きく息を吐く。

陽鞠、振り返って。

陽鞠「大丈夫？ 一冊持とか？」

首を横に振る寿道。

寿道「大丈夫や、これくらい」
歩き始める寿道。陽鞠も。

○前同・閲覧席（朝）

机の上に縮刷版四冊を置く陽鞠。

寿道「ぼく、もつと向ここの席に座るから」

陽鞠「え、なんで？」

寿道「こういうことはな、まずは自分の世界

に没頭してやるもんなんや」
陽鞠「ポットー」

頷く寿道。

陽鞠 「うん、そっか。そやんね」

離れた席へと歩いて行く寿道。陽鞠、
席に着く。

陽鞠 「よっしゃ、ポットー開始や」

朝日新聞縮刷版、後半あたりのページ
をパッと開く陽鞠。

陽鞠 「いきなり当たってるか」

「犯人を狙撃 人質全員救う」の一面
大見出しと、毛布で体を覆われ、警察
官に付き添われ歩いて行く女性の人
質たちの写真が掲載されている。しば
らくその写真を見ている陽鞠。やがて
ページを繰っていき社会面へ。

陽鞠 「うわっ」

狙撃され、顔中血まみれの犯人、緑山
が担架に乗せられ運ばれていく写真
が掲載されている。

陽鞠 「こんな写真、載せてもええのん……」
記事を読み進めていく陽鞠。

× 縮刷版を読みふけている陽鞠。やつ
てくる寿道。 ×

寿道 「杉原さん」

陽鞠、気づかない。

寿道 「杉原さんって」

顔を上げる陽鞠。

寿道 「外行こか。もうお昼や」

微笑む寿道を見て頷く陽鞠。

○ コンビニエンスストア・イトインコーナ

1

横並びに座り食事をしている陽鞠と
寿道。陽鞠はサンドイッチにオレンジ
ジュース。寿道はおにぎりにお茶。浮
かない顔の陽鞠。

寿道「全然しゃべらんし」

陽鞠「え」

寿道「図書館出てからずっと」

陽鞠「うん。キツイわ正直」

寿道「スマホでちよつとは調べてたんやろ」
陽鞠「うん。けど新聞記事読んだら、なんて

いうか、リアル感の圧をすごく感じるんよ。

ほんまに酷い事件やったんやなああって、実
感するっていうか——めっちゃくちややつ

てるやん、犯人の緑山」

寿道「うん——人質どうしで耳——ごめん、

食べてるときにする話やないな」

陽鞠「かまへん、食べてるときにする話やな
いこと調べてるんやから。ほんま、死んだ

ふりしてる人の耳、同じ人質に削がさせる

やなんて、どんな神経してんのや」

寿道「杉原さん」

陽鞠「なに」

寿道「おばあさん、人質やったって、やっぱ
り思ってる？」

寿道を見つめ、小さく頷く陽鞠。

寿道「それ、確かめたい？」

陽鞠「正直、分からへんくなってる」

おにぎりを食べ終え、ナツプザックか
らピルケースと水の入った小さなペ

ットボトルを取り出す寿道。掌に薬を

二錠置き、陽鞠を見て笑う。

寿道「昼は二つだけ。朝晩は五つ。これでも

少なくなつた方」

ペットボトルの水で薬を飲み下す寿道
道をじつと見ている陽鞠。

○大阪市立中央図書館・一階フロア
縮刷版をコピーしている陽鞠。

○前同・エントランス

向かい合っている陽鞠と寿道。

寿道「そしたら、今日はこれで」

陽鞠「やつぱり、春野君の言うたこと正解や
った」

寿道「え、なにが？」

陽鞠「二月になつても事件の記事たくさん載
つてるわ。なんであんな酷い事件がおきた
んか、記者の人が一生懸命追っかけてるの
、
よう分かるわ」

寿道「リアル感の圧やな、昭和の」

陽鞠「うん、ほんまに」

寿道「それに負けんようにせんとな」

陽鞠「うん。春野君はちっさい時からここに
通つてたんや」

寿道「うん、ここで本ばっかり読んでた――
つて今でもやけど。そしたら三日後」

陽鞠「うん」

去っていく寿道。その背中を見送って
いる陽鞠。

陽鞠「春野君！」

振り返る寿道。

陽鞠「あんたええなあ、こんなええ図書館が
すぐ近くにあつて！」
頷く寿道。

寿道「ここ、ぼくのホームグラウンドや！」

杉原さん、今日いっしょにここ来れて、なんかすごい嬉しかったわ！　ありがとう！　昭和に負けんとこな！　さいなら！」

寿道、晴れやかな笑顔で手を挙げ、振る。

陽鞠（M）「うわ、これ、ヤバいんちゃう……」

陽鞠「うん、さいなら！」

陽鞠も手を挙げ、振る。逆方向へ歩き出す二人。

陽鞠「マジで、ヤバいかも……」
陽鞠、歩いていく。

○杉原家・居間（夜）

向かい合って食事をしている陽鞠と佳也子。

佳也子「図書館でよう勉強できたんか」

陽鞠「え、あ、うん。まあ」

佳也子「なにを調べてるのんや」

陽鞠「え——えつと、あんな、プロ野球の試合のこと、調べてるねん」

佳也子「あんた野球なんかそないに好きやっただ？」
陽鞠、髪の毛を触りだす。

陽鞠「隣の席の子がな、野球が好きでな、いっしょに調べてるんよ。それに、これでも

元ソフト部やし」

佳也子「へえ、そうかあ」

陽鞠「うん、せやねん」
しきりに髪の毛を触る陽鞠。

○へ大阪球場・1979年の日本シリーズ第
七戦、九回裏の場面

江夏豊の九回裏19球目、三塁走者藤瀬史朗がホームへ走る。打者、石渡茂がバントの構えをする。スクイズ敢行。すかさず立ち上がるキャッチャーの水沼四郎。カーブの握りのままウエストボールを投げる江夏。石渡の突き出したバットをかいくぐるようにして、ボールは水沼のミットに収まる。本塁手前までできていた藤瀬、慌ててサイドベースへ戻ろうとするが、その背中に激しくミットを叩きつける水沼。大喜びの広島ベンチ。マウンド付近に集まり江夏を称える広島内野陣。

その映像に重なる陽鞠と寿道の声。

寿道（声）「杉原さん、ごめん。夜遅くに」

陽鞠（声）「かまへんよ、どうしたん」

寿道（声）「すごいことが分かったんや。『江夏の21球』は、ほんまは『江夏の14球』

やったんや！」

陽鞠（声）「え、どういうことなん？」

寿道（声）「なに言うてるか分からんやんね。

つまり、事実と真実は違うんや！」

陽鞠（声）「『事実と真実は違う』……」

寿道（声）「明日、学校の情報処理室に来てくれへん？ 開いてるから。視てほしい動画があるんや。あかんかな」

陽鞠（声）「ええよ。何時にする？」

寿道（声）「十時とか、あかん？」

陽鞠（声）「うん、ええよ」

寿道（声）「いっしょに視て、思ったこととか言うてほしい」
陽鞠（声）「うん、分かった」

○朔ヶ原高校・情報処理室（朝）

椅子を寄せ合って座り、パソコンの画面を視ている陽鞠と寿道。映し出されているのはNHKで放送されたNHKスペシャル『江夏の21球』。

寿道「ここ、ここなんや！」

画面に映し出されているのは、九回裏、江夏の14球目を捉えたバッター

佐々木恭介。ワンバウンドした打球は、ジャンプして捕球しようとした三塁手の三村敏之の出したグラブの先を掠め、フェアウルゾーンへ。三塁塁審はフェアウルの判定を下す。

そこで一旦画面を止める寿道。

陽鞠「これが？」

寿道「佐々木が打った球が跳ねたのはフェアゾーン。サードの三村がジャンプした位置ももちろんフェアゾーン。そこから打球が三村のグラブに触れてたらフェアウルやなかった。フェアやった。分かるやんね」

陽鞠「これでも元ソフト部やで。補欠やったけどサードやってん。それくらい分かるわ」
頷く寿道。

寿道「あの打球がフェアやったら、三塁ランナーの藤瀬は当然ホームイン。二塁ランナーの吹石も代走で足は速い。三塁コーチの仰木さんは絶対腕回してた。吹石生還の逆転サヨナラで近鉄は優勝してたんや」

陽鞠「うん」

寿道「触ってたんや」

陽鞠「え」

寿道「サードの三村は佐々木の打球、グラブの先で触ってた」

栗の挟まれた一冊の本を陽鞠に差し

出す寿道。文春新書、二宮清純著の『プロ

野球「衝撃の昭和史」である。手に取り、栗のページを開く陽鞠。

寿道「この本読んで知ったんや。佐々木恭介さん、1994年に『遙かなる野球少年』って本を出してる。その時にな、三村さんに、あの十四球目のこと訊きに行ったそうや」

開いたページに目を落とす陽鞠。

蛍光ペンで塗られた箇所を音読し始める。

陽鞠「へ」あれ、どうやったんですか？」と。

最初は「しゃべれんぞ」と言われたんですが、「まあまあ、そう言わんと。別にそれだけを取り上げるわけじゃありませんから」と粘った。すると「触った。グラブにかすったんや」と正直におっしゃいました。あそこで「しまったー！」「くらい言ってくれば良かったんですけど（笑）」
なこれ、すごいことやろ、これって」

寿道「うん。めっちゃすごいです。プロ野球の歴史が変わってたんやで」

陽鞠「そやのに『カッコ笑い』ってなんなん。

悔しかったはずやん、佐々木って選手。意味分からへん」

寿道「うん。佐々木さんが悔やんでるのはそ

の前の十三球目を見逃したことなんや」
マウスを操作し、画面を少し前に戻す
寿道。

江夏の投げた九回裏十三球目のスト
レートをあっさり見逃す佐々木。
また本に目を落とす陽鞠。

陽鞠「『あれは一生の悔い。もう四、五十回、
同じ夢を見ています』——そやけど、そや
けどさ。ほんまは三村のグラブに触ってた
んやろ」

寿道「そうや」

陽鞠「それがちやんと判定されてたら、『江
夏の21球』は『江夏の14球』で近鉄が
優勝してたわけやろ」

寿道「そうや、真実はな」

陽鞠「真実は」
寿道「電話で言うたやろ『事実と真実は違う』
って」

またマウスを操作する寿道。

画面の中、江夏の投げた十四球目を打
つ佐々木。横っ飛びでファウルゾーン
に飛び込む三村。ボールはファウルグ
ラウンドへ。その映像とダブって三村
の顔が映り、語る。

【三村】「へああ、ファウルか、ああ、よかつ
たな、思ったんですよ。まあ、ぼくがあん
まり背が高くなくてよかったな、思ったん
ですよ。もうなまじっか大きくてね、少し
でもグラブに当たったりしてるともうフ
ェアになってますからねえ」

画面をストップさせる寿道。

陽鞠「めっちゃ嘘言うてるやん、この三村っ

ていう人」

寿道「うん、嘘やんな。けど杉原さん、自分が三村さんと同じ立場やったらどう？」

陽鞠「え」

寿道「こんなインタビュ―受けて『いや、あれ実はクラブに触ってたんですよ』とか言える？」

陽鞠「それは――無理」

寿道「やんな。誰かてそうやと思う。けど、時間たってからやけど、それをちやんと佐々木さんに言うた三村さんも、その前の十三球目を打たへんかったことをずっと悔やんでる佐々木さんもすごいなあ。一流のプロの心って、ほんまにすごい。ほくはそう思う」

陽鞠「――うん」

陽鞠（M）「あ、またヤバい……」

寿道、画面に目をやって。

寿道「小説家になれたらなって、思ってた。なれたらええなあって思ってた。けど、そんなん無理やろなって思ってた――今は違う」

陽鞠「違うのん？」

寿道「ぼくは、スポーツのノンフィクションライターになりたい。一流のプロアスリートの心技体に迫れる、ライターになりたい。運動できひんぼくやからこそ掴める真実があるはずなんや。どうなったらなれるやなんて分からへんけど、絶対になりたい」

陽鞠、ストツプモーシヨンの三村敏之の顔を視ている寿道の横顔をじっと見ている。

陽鞠(M)「あかん。完全にヤバいの超えた、
今のんで……」

陽鞠「うん。なれるよ春野君やったら。そんなライターに。絶対なれる」

寿道、陽鞠を見て微笑む。

寿道「ありがたい。杉原さんにそない言うてもらえと、ほんまになれそうない気がしてきた」

陽鞠「——春野君」

寿道「なに」

陽鞠「わたしもやっぱり真実が知りたい」

寿道「おばあさんのこと」

頷く陽鞠。

陽鞠「今晚、確かめる」

陽鞠も画面を視る。

○杉原家・居間(夜)

食事後。見つめ合って座っている陽鞠と佳也子。

陽鞠「以上、ばあばは七星銀行東里支店立てこもり事件の人質やったっていうのがわたしと春野君の最初からの推測や。どうなん、ばあば」

佳也子「——野球のこと調べてるんやなかったんか」

陽鞠「そんなん嘘やって分かってたやろ。わたしばあばになにを調べてるか訊かれたとき、めっちゃ髪さわってたやろ、後で自分で気がついたんやけど」

佳也子「——」

陽鞠「子供のときばあば言うたやん。わたしがなんかしょうもない嘘ついたときや」

『よう覚えとき、あんたは嘘つくとき髪触る癖があるんや』って。それで頬っぺた思いつきりつねったやん。めっちゃ痛かったわ。久しぶりについた嘘やからつい癖が出たみたいやわ」

佳也子「嘘はつかへん約束、あのときしたはずやのにな」

陽鞠「そやな。けどばあばも嘘つきや。ずっとずっとの嘘つきや」

佳也子「陽鞠、あんた」

陽鞠「ほんまは赤い髪やのに黒に染めて。わたしこの髪大好きや。このバーガンディ大好きや。そやから学校に地毛証明書出してる。サマルカンドの沖村さんにハンコついてもらって、そんなアホみたいなもの出してる。けどばあばは黒に染めてる。嘘の髪の毛でずっと生きてる。大嘘つきはどっちやのん」

佳也子「陽鞠っ！」

陽鞠「なんやのん！」

佳也子「あんたにわたしのなにが分かるんや！」

陽鞠「なんにも分からへんわ！ そやから知りたいたんやろ！ なにを隠すん！ なんで隠すん！ なんであんな大きな声でチャネル替えて言うたん！ なんてあの夜喚き声あげて飛び起きたん！ なんて髪を毛ずっと染めてるん！ 隠し事して嘘ついてるのは、ばあばの方やんか！」

陽鞠をじっと見つめる佳也子。その視線を外さない陽鞠。

陽鞠「なあ、あの銀行に勤めてたんやろ。事

件の時裸にされて、犯人の周りに座らされてたんやろ」

佳也子「そんなに知りたいんか、あの事件のこと」

陽鞠「知りたい。ばあばがずっとしんどい思いしてきたんやったら、よけいに知りたい——お父さんとあ母さんとじいじ、いっぺんに死んでから、二人で生きてきたんやんか、ばあば」
俯く佳也子。ため息をつき首を横に振る。

佳也子「七星銀行の東里支店には勤めてた。けど、あの事件のときにはもう退職してた」

陽鞠「——そう、なん？」
佳也子「そうや。今の料理教室で助手やってたときや。あの事件が起きたのは」

陽鞠「ほんまに人質やなかったん」
佳也子「陽鞠——わたしが体許した男は順平、

あんたのじいじだけやない。もう一人いてる」

陽鞠「え？」
佳也子「あの人質事件の犯人、緑山勝次が、

わたしの最初の男や」
息を呑む陽鞠。

○七星銀行東里支店・外景
へT 1978年2月

○前同・店内
カウンターに座り接客をしている女性行員たち。その中に23歳の日野佳也子がいる。その髪は紫がかった鮮や

かなバーガンデイ。にこやかに接客を
する佳也子。

× ×
入店してくる男、緑山勝次。空いてい
た佳也子のカウンター前に立つ。

佳也子「いらっしやいませ」

緑山「通帳作りたいんやけどな、ここの」

佳也子「はい、ありがとうございます。なに
かご身分を証明できるもののご印鑑はお
持ちでしょうか」

緑山「はいはい、お持ちいただいております
よっと」

ポケットから印鑑と財布の中の免許
証を取り出し、差し出す緑山。佳也子、
クスッと笑って。緑山、佳也子の名札
を見て。

緑山「髪、ええ色に染めてるんやね、日野さ
ん」

佳也子「あ、地毛なんですこれ」

緑山「地毛！ほんまに？」

佳也子「はい。みなさん驚かれます」

緑山「そつか。日野さん、ボクこういう仕事
してるねん」

名刺を差し出す緑山。《パブ【ドルチ
エ・ノッテ】フロントマネージャー
緑山勝次》と書かれている。

緑山「よかったですら取っというてえや」

佳也子「はい、ありがとうございます」
名刺を受け取る佳也子。

緑山「フロントマネージャーとかたいそうに
書いてるけど、要はただのバーテンや。パ
ブとか行ったことある？」

佳也子「いえ」

緑山「友だち誘っておいでえや。女の子でも安心して楽しくお酒飲める雰囲気づくり

に励んでるんやでえ」

佳也子「そうでらっしゃいますか。いつかぜひ。では、こちらの用紙の太枠の中に必要事項をご記入くださいませ」

緑山「はい、ご記入くださいますよつと」
またクスッと笑う佳也子。

○前同・女子更衣室

業務を終え着替えをしている佳也子
と同僚の増山香里（23）と岡崎美幸
（23）。

香里「なあ、佳也子」

佳也子「んう」

香里「あんた今日お客さんから名刺もらって
たやろ。ええ感じに崩れた雰囲気のもの
から」

佳也子「あ、うん」

美幸「え、ほんまに。見せてえや、それ」

佳也子「ええよ」

バッグから名刺を出し二人に見せる
佳也子。

香里「《パブ【ドルチエ・ノツテ】フロント

マネージャー緑山勝次≒やて」

佳也子「バーテンさんやねんで。女でも安心

して飲める店や、みたいなこと言うてた」

美幸「ほんまにい。そしたら今月給料出たら
行ってみようや、三人で」

香里「ええやん、それ。わたしパブなんか行
ったことない。佳也子は？」

佳也子「わたしもない」

美幸「わたし、哲也と行ったことあるわ。なあ、ほんまに行こ三人で。佳也子の退職前祝いや」

香里「うん。けどワリカンやで」

佳也子「なによそれ。どこが前祝いやのん」

香里「三人で行つてやで、一人分二人で持つのは痛いわあ。なあ美幸」

美幸「そらそうや。奢つてもらうのは支店の

お別れ会のときでええやんか。友情の証し

としてその日はワリカン。当然や」

佳也子「なにか友情の証しやのん」

笑う三人。

香里「それにな佳也子。あんたまた会いたい

って思ってるやろあのバーテンさんに」

佳也子「べつに、そんなことないよ」

香里「いや、思ってる。なんやしらんポーっ

としてるもん、あんた。あの人接客してから、今日」

美幸「お、お、お。ついに佳也子ちゃんが

大事に守り続けてきた純潔が散らされち

やうとかがやってきましたかなあ」

佳也子「そやかからそんなん違うって」

名刺をバッグにしまっ佳也子。着替え

を済ませた三人、楽し気に話しながら

更衣室を出ていく。

○パブ・ドルチェ・ノッテ・入口（夜）

歓楽街にある店に入っていく佳也子、
香里、美幸。

○前同・店内（夜）

カウンター内で正装した緑山が立っている。

緑山「今日はようこそいらっしやいました。ボックス席へどうぞ」

ボーイがボックス席へ三人を案内する。並んで座る美幸と香里。向かい合
って佳也子。

香里「オシヤレなお店やんね」
美幸「うん」

やってくる緑山。

緑山「こんばんは。改めましてようこそいら
っしやいました——佳也子さんからご予約
のお電話いただきましたとき嬉しかったわ」
香里「いやあ、佳也子さんやてえ」
美幸「ちよっともうなにそれえ」

佳也子、俯いている。

× × ×

カウンター内でシェーカーを振る緑
山を見ている三人。

美幸「かっこええやん彼、なあ佳也子さん」
香里「ほんまに。なあ佳也子さん」
佳也子「ちよっともう怒るで」

真剣な表情の緑山を見つめる佳也子。

× × ×

ほろ酔いの三人。

美幸「緑山さん」

美幸「カウンター内から三人を見る緑山。
美幸「こっち来ていっしょに飲みませんか？」

お仕事やからあかん？」

緑山「いや、ええですよ」

緑山「ちよっと店頼むわ」

ボーイに告げカウンターのの中から出る緑山。

× 佳也子の隣の席に座っている緑山。 ×

緑山「そうか、佳也子ちゃんは来月で仕事やめるんか」

香里「そう、こいつは裏切り者。いっしょに七星銀行入った銀嶺短大卒三人組の裏切り者や」

美幸「ほんまや」

佳也子「そんなん、言わんといてえや……」

香里「アホ、誰が本気で言うてるんよ」

緑山「料理の道に本気で進みたくなっただんな、佳也子ちゃんは」

頷く佳也子。

緑山「なあ、三人のこと当てたるか」

香里「え、わたしらのことって？」

緑山「美幸ちゃんは彼氏いててうまいこといつてる。香里ちゃんは、そやな——つきあってた人いてたけど最近別れた。ちがう？」

啞然として緑山を見る香里と美幸。

香里・美幸「なんで分かるんですか？」

緑山「ま、こういうのも商売のうちや」

俯いてカクテルグラスを持っている

佳也子を見つめる緑山。

緑山「言うてええ？」

コクンと頷く佳也子。

緑山「バージンやな、佳也子ちゃんは」

佳也子「……変、ですか」

首を横に振る緑山。

緑山「きれいな赤い髪やなあ」

緑山を見る佳也子。微笑んでいる緑山。

○七星銀行東里支店・前の路上

業務を終え、銀行から出てくる佳也子。路上に停車している赤いスカイライオンからプツとクラクションの音。目をやる佳也子。

緑山「ハロー、佳也子ちゃん」

佳也子「緑山さん」

緑山「香里ちゃんと美幸ちゃんは？」

佳也子「美幸は彼氏と映画観るって。香里は

高校のときの女友だち三人と男の子三人

とコンパやるって、とつとと」

緑山「ははっ、『とつとと』かあ。明日日曜

で休みやる。三人連れて六甲山の夜景見に

連れてったろ思ったんやけどなあ」

佳也子「緑山さん、お店は？」

緑山「俺、土曜日月二回は休みとることにし

てるねん。できる人間がいちばん忙しい曜

日にずっと店仕切ってたら後進が育てへ

んからな」

佳也子「そうなんですか、あの——」

緑山「ん？」

俯いている佳也子。

手を伸ばし助手席のドアを開ける緑

山。乗り込む佳也子。

○車の中

運転をしている緑山。無言の佳也子。カーラジオのスイッチを入れる緑山。キャンディーズの『やさしい悪魔』が流れてくる。

緑山「来月いよいよ解散か、キャンデーイズ」
『やさしい悪魔』をハミングする緑山の横顔を見つめる佳也子。

○ステーキハウス・店内

テーブル席で向かい合ってステーキを食べている佳也子と緑山。

緑山「おいしい？」

佳也子「はい、すごく。あの」

緑山「ん？」

佳也子「お酒、飲まはらへんのですか」

緑山「女の子連れて六甲山行くのに飲酒運転はできんよーちよつと」
ボーイを呼び止める緑山。

緑山「シャトーマルゴの69年、ある？」

ボーイ「はい、ございます」

緑山「グラスで彼女に」

佳也子「え、そんなんええですよ」

緑山、手で小さく佳也子を制し。

緑山「頼んだで」

ボーイ「かしこまりました」

立ち去るボーイ。緑山、佳也子を見て。

緑山「料理の道に進むんやろ。ええ肉にはええ赤ワインや。知っとき」

緑山を見つめ頷く佳也子。

○六甲山上展望台（夜）

肩を並べて眼下に広がる神戸の夜景
を見ている佳也子と緑山。

佳也子「うわぁ、きれい！」

緑山「やろ。まさに百万ドルの夜景やー英
子もここに連れてきたったとき、えろう喜

佳也子「え」

佳也子「え」

緑山「いつしよに住んでる女とちよつと大きいケンカしてしもうてな、出て行ってしもてん。けど居場所の見当はついてる。ツレのところ泊まり歩いてるか、実家にいてる。近いうち迎えにくつもりや」

佳也子「そうなんや」

緑山「うん——寒いやろ」

佳也子の肩を抱き、引き寄せる緑山。

佳也子「なあ」

緑山「なんや」

佳也子「遊びなんやったら、本気で遊んでよ」
見つめ合い、キスを交わす二人。

○ラブホテル・部屋（夜）

ベッドの上、佳也子の上に覆いかぶさり、ゆっくり腰を動かしている緑山。

破瓜の痛みに耐えている佳也子。

緑山「痛いかな」

佳也子「：：んっ、大丈夫、やから」

緑山「ちゃんとしてるから安心し」

佳也子「うん——」

優しく佳也子の髪を撫でる緑山。

佳也子の声、痛苦の中にやがて少しづつ喜悦の響きが混じり始めて。

× × ×

ベッドに腰掛けビールを飲んでる

緑山。佳也子、シーツを体に纏うよう

にして緑山の背中を見ている。

緑山「近々、胸に墨入れるつもりでな、俺」

佳也子「墨？」

緑山「入れ墨や。箔つけたろ思ってたな。英子の好きな薔薇の柄にしよって思ってる」

佳也子「そう——戻ってきたらええね、英子さん」

緑山「ん？ ああ、戻すよ。絶対戻す」

佳也子「羨ましいなあ、それだけ愛されて」

緑山「伝わらん愛もあるんよなあ」

佳也子「——なあ、どうやった、わたし」

緑山、佳也子を見て。

緑山「そやな、新鮮やったわ。処女抱いたん久しぶりや。乳首まっピンクで興奮したわ」

佳也子「スケベえ」

緑山の背中に抱きつく佳也子。笑いあい、そのままキスをする二人。

○居酒屋・外景（夜）

大きな店構えの居酒屋。暖簾が出ている。

○前同・店内・座敷席（夜）

賑わっている店内の座敷席。七星銀行東里支店の従業員たち三十人ほどが座っている。上座、立って挨拶をしている支店長の船曳（45）。

船曳「えー、ということですね、今年度末をもって、受付顧客業務を担当してくれていた日野佳也子さんが退職されることとなりました。みなさんお聞き及びのことやとは思いますが、日野さんは現在通われている料理教室において、その腕を存分に発揮される中、講師の方に見込まれ、まさに

白羽の矢を立てられることとなり、助手としてスカウトされることとなりました。当支店といたしましては、本当に、なんと言いましようか、今、彼女に辞められるのは、痛恨の極みといったところもあるのですが、新たな道、新しい夢へと旅立つ日野さんを、快く、気持ちよく送り出してあげましょう。では、日野さん、どうぞ」

座る船曳。全員の拍手。立ち上がる佳也子。深く礼をしてから頭を上げる。

佳也子「あの、本日はわたしのためにこのような席を設けてくださって、本当にありがとうございます。お世話になって丸三年、ずっとここで働きたい気持ちもあったのですが、短大時代から通っていた料理教室から助手として勤めないかとのお声がけをいただき、迷いに迷ったのですが、新たな道に進むことに決めました。船曳支店長はじめ諸先輩方には時に厳しく、常に温かくご指導いただけました事、そして短大の同級生、香里、美幸と励ましあいながら働けた事、一生の財産です。宝物です。忘れません。東里支店で働くことができて、本当に良かったです。みなさん、ありがとうございます」

涙ぐみながら深く頭を下げる佳也子。拍手が沸き上がる。

× 乱れている座。× 笑いかける声や嬌声があがっている。その一角、肩寄せ合うようにして飲んでいる佳也子、香里、美幸。

美幸「あんた、ほんまにええのん？」
佳也子「なにが？」

香里「なにがって、バーテンさんのことに決まってるやん」

佳也子「うん、ええねん。遊びやって割り切ってたし、バージン、もう重かったし。捨てるにはちようどええ感じの人やったわ。捨向こう本気で好きな女の人いてるし」

美幸「まあ、佳也子が本気で恋人としてつきあうにはワルっぽすぎたかなあ」

佳也子「うん。さすがに入れ墨するような人とずっとつきあうのは無理やわ」

香里「確かにな」
佳也子「なあ、香里、美幸。またいっしょにご飯行ったりしよな。旅行いったりしよな」

領き、笑いながら佳也子の髪をクシヤクシヤする香里と美幸。

佳也子「もう、やめてえやあ」
ただ嬉しそうな佳也子。

○七星銀行東里支店・行内

フロアに警察官二人と、支店長船曳、男性行員の鈴木の二人が横たわっている。それぞれの床に血だまり。四人とも死んでいる。

フロアのすみに人質となった客たち、二十名ほどが固まって怯えながら座っている。

支店長席に猟銃を肩がけにして座っているチロリアンハットにサンングラスの緑山。カウンターに女性行員十八人を全裸にして座らせている。その中

に香里と美幸も隣あわせでいる。
ニヤニヤ笑っている緑山。後ろから獵銃を香里の頬に当てる。

ビクつとなる香里。緑山、席から立ち、二人の間に顔を入れ、肩を抱き寄せる。そして二人だけに聞こえる声で。

緑山「香里ちゃんと美幸ちゃんやんな。記憶力ええやろ。借金の取り立てもやってたからな俺。人の名前きっちり覚えるのも仕事のうちやねん」

ガタガタ震えている香里と美幸。

緑山「どこに押し入ったろかいろいろ考えた。縁あるところがええかなあって、ここに決めた。なんせここ、処女貰った女の勤めてた銀行やろ。ゲンがええって思って決めたんや。帽子被ってグラサンとマスクしてたら、君らも氣いつかへんやろ思ってな。けど、裏目に出たわ」

震え続けている香里と美幸。

緑山「今でもつきあいあるん？ 佳也子ちゃんど？ なあ、香里ちゃん」

頷く香里。

緑山「そっか、仲ええんやな。なあ、後でボリになにかいろい訊かれても、佳也子ちゃんのことは黙っといたりや。一晩だけでも抱いた女に迷惑かけたあない——おい、おまえら分かったんかい」

震えながら頷く香里と美幸。

緑山、支店長席に坐り直す。

緑山「早い事金出さへんから、こないなことになっただんじや！ 絶対金持って上手い

ことこ抜けたるからな、クソが！」
天井に向けて発砲する緑山。悲鳴が上がる。

○酒問屋・駐車場（朝）

トラックに瓶ビールのケースを積んで

いる杉原順平（24）。社長の神保（55）がやってくる。

順平「おはようございます！」

神保「おはようさん順ちゃん。しかし、えらい事件が起きたもんやなあ」

順平「まだ犯人、捕まってないんですか」

神保「ああ。ずっと銀行のシャッター閉まつたまんま。進展なしや」

順平「そうですか」

神保「あ、そやそや順ちゃん、聞いたで聞いたで。先月から彼女とアパートで同棲してるそやないかあ」

順平「いや、同棲いうか。行ったり来たりしてるから、半同棲っていうか」

神保「この先も考えてるんやろ」

順平「それは、まあ——はい」

神保「仲人、遠慮せんと頼んでや。記念の十組目が順ちゃんやったら、俺も嬉しい限りやで。料理上手の嫁さん、最高やないか」

去っていく神保。苦笑する順平。力強く積み込みを続ける。

○夢山ハイツ・外景（夜）
ボロアパルトである。

○前同・203号室（夜）

シャッターの閉まった七星銀行東里支店の様子が映し出されているテレビ画面を視ている佳也子と順平。

順平「ほんまによかったな。そのまま勤めてたら、おまえかて」

佳也子「けど、けど、香里や美幸が——」
テレビからアナウンサーの声。

アナウンサー（声）「ただ今、警察から発表がありました！ 警官二人と行員二人を射殺し、人質を取り現在も立てこもり続けている男の名前は緑山勝次、三十歳！ 現在の職業は不明ですが、かつて大阪市内のパブでバーテンダーをしていたとのこと！ 繰り返します、犯人の男は元バーテンダー緑山勝次！」

息を呑む佳也子。

順平「元バーテンダーか」
立ち上がる佳也子。

順平「大丈夫や、香里ちゃんも美幸ちゃんも絶対無事に解放されて出てくるよ」
佳也子、無言でトイレへ。

○前同・トイレ（夜）

便器を前にうずくまる佳也子。ゲイと吐く。

○大阪市内の上空

報道ヘリ三機が七星銀行東里支店、上空を飛んでいる。

○七星銀行東里支店・外景

警官隊、機動隊員たちが支店周囲を取り囲んでいる。大勢の野次馬たちもいる。

ヘリのローター音に重なるアナウンサーの声。

アナウンサー（声）「へ緑山勝次が客や銀行員四十名近くを人質に取り、七星銀行東里支店に立てこもって三日が経ちました。緑山は警官二人、行員二人を猟銃にて射殺。母親の説得にも応じず、立てこもりを続けています。警察は銀行三階に捜査本部を設置。未確認ですが、特殊狙撃部隊が行内に潜入との情報もあり――」

へ八発の発砲音

緑山（声）「殺す、ぞ……」

○七星銀行東里支店・外景

支店の閉じていたシャッターが三センチほど開けられ、その間から警官たちが次々と匍匐前進で入ってくる。

アナウンサー（声）「へあ、あっ！　今、閉じていたシャッターが少し開けられ、警官隊、機動隊員たちが次々に行内へと、入ってきます！　事件に動きが、何らかの動きがあります！　」

○前同・外階段

警官に支えられながら、毛布をかぶせられて、外階段を降りてくる人質たち。

その中に香里と美幸もいる。

(F・O)

○杉原家・居間(夜)

じつと見つめあっている陽鞠と佳也子。

陽鞠「じいじは、知ってたのん？」

重い沈黙。

陽鞠「訊いてるやん」

やがて頷く陽鞠。

陽鞠「そっか。なんかそれ聞いてほっとした。それから、髪、黒に染めるようになったん？」

頷く佳也子。

佳也子「陽鞠、お願いや。そこから先はもう

ほんまに訊かんという。お願いや」

陽鞠「うん、分かった」

佳也子の目から涙が零れる。

佳也子「悪い子や陽鞠は。あの事件のこと調べたりして、ずつと隠してたこと言わせたりして、ほんまに、悪い子や」

佳也子、泣き出す。

陽鞠「ばあば……」

佳也子「軽蔑、したらええ。あんなケダモノみたいな男にこっちから体許したわたしのこと、軽蔑したらええ」

佳也子ににじりより、強く抱きしめる陽鞠。

陽鞠「なんでやのんよ、そんなわけないやろ。

軽蔑なんかするわけないやん」

激しく泣く佳也子を強く抱きしめる

陽鞠。陽鞠も泣いている。

○前同・佳也子の部屋（夜）

ベッドの中でいっしょに寝ている陽鞠と佳也子。陽鞠、佳也子に抱きつくようにして。

床に置いたスマホからラインの着信音が鳴る。ベッドから出て、スマホを手に取る陽鞠。画面をじっと見ている。陽鞠「なにが予定変更や。ついて行ったる」返信する陽鞠。すぐ後の着信音。

陽鞠「そやからついて行く言うてるやんアホ」返信する陽鞠。またすぐの着信音。読みはするが返信をしない陽鞠。

陽鞠「もう知らん」スマホを床に置き、ベッドに戻る陽鞠。またラインの着信音が鳴る。無視をする陽鞠。

佳也子「ええんか」

陽鞠「ええんよ、わたしのしたいようにするから」

佳也子に抱きつき、その髪を優しく撫でていく陽鞠。

陽鞠「明日、サマルカンドの沖村さんにラインで、きれいに元の髪にできるか訊いてみるから——わたし見たいんや、ばあばのほんまの髪の毛——なあ、お願いやからもう自分のこと許してあげて、ばあば」

佳也子「いっしょのこと、言うんやなあ」陽鞠「え」

陽鞠を抱き寄せる佳也子。

○地下鉄・御堂筋線・車両内

進んでいる地下鉄。

隣どうして座っている陽鞠と寿道。

寿道「おばあさんには、訊いたん？」

陽鞠「うん、まあ」

コクンと頷く陽鞠。

寿道「そっか」

しばらく無言の二人。

陽鞠「あのやあ」

寿道「なに」

陽鞠「わたしらの推測は間違いやった。ばあ

ばあはあの事件の人質やなかった」

寿道「え——そっか」

陽鞠「そこから先、訊かへんのん？　ほんま

はどうやったん、とか」

寿道「いや、それは杉原さんとおばあさんと

のことやから。ぼくが知るべきことやない

から」

陽鞠「——こういうところもやねんなあ」

寿道「え？」

ムスツとしている陽鞠。

寿道「えつと杉原さん、なんで今日いっしょ

に来たかって」

陽鞠「そやから、あかんのん」

寿道「いや、あかんことないけど。けどやつ

ぱりこういうことは自分一人でやるもん

やから——」

陽鞠「勝手に決めんといてえや、そんなん」

ブスツとした顔つきの陽鞠を不思議

そうに見る寿道。

○ なんばパークス

屋外の商業施設。行き交う人々。地上

にあるホームベース型の記念碑。それを見下ろしている陽鞠と寿道。

陽鞠「ここが野球場やったなんて、信じられへん」

寿道「うん。南海ホークスのホームスタジアム、大阪球場。ここがほんまのホームベースがあった場所や」

陽鞠「え、まってよ。なんで南海ホークスやの？ 日本シリーズに出たのは近鉄バファローズやろ。近鉄の球場でやらへんかったん？」

寿道「うん、当時の近鉄バファローズのホームやった藤井寺球場はナイター設備がなくてな、第二ホームの日生球場は収容人数が規定の三万人に満たへんくて、近鉄が南海のホームやった大阪球場借りてやったんが、1979年の日本シリーズなんや」

陽鞠「ふーん、そうやったんや」
寿道「ピッチャーズプレートの記念碑もあるんやで」

前を指さす寿道。歩き出す。ついていく陽鞠。

ホームベースの記念碑から十八・四四メートル先のピッチャーズプレート記念碑の前に立つ二人。

寿道「ここに、江夏豊が立ってたんやな。ここから『江夏の21球』投げたんやな」

陽鞠「立って見たら」
寿道「えーそれはできんよ」

陽鞠「なんでよ」
寿道「なんか、やっぱりそれはできひん」
陽鞠「遠慮しい。こんなん気がつかんと、だ

れも踏んでつてゐるわ。ほら、立ってみて」
寿道「——うん」

記念碑の上に立つ寿道。まっすぐ前を見る。その方向へ歩いて行く陽鞠。

寿道「え、杉原さん？」

陽鞠、ホームベースの記念碑の後ろに立つ。

陽鞠「春野くん！」

寿道「なんや」

陽鞠「言うてみてよそこから。今わたしに思つてること！」

寿道「思つてることって」

陽鞠「ないん？ あるやろ！ 言うてって！」

寿道「あの、なんで」

陽鞠「なんでもええやん！ 聞きたいんよ！ ほら、言うてって！」

寿道「——ぼくは、杉原さんといっしょのクラスになれて嬉しい。一学期、隣の席になれて、嬉しかった」

陽鞠「まあ、ストライクワン。それから！」

寿道「『それから』って」

陽鞠「それだけ？ まだあるやろ。二球目投げてきてえや！」

カップルが気づき立ち止まる。

寿道「ツレやか言ってくれて、ラインの交換とかしてくれて、いっしょに市立図書館行ったり、今日ここに来れたりして、嬉しい」

陽鞠「ストライクツー！」

もう一組のカップルが立ち止まり、二人の様子を見る。

寿道、俯く。

陽鞠「どないしたん！」

首を横に振る寿道。

寿道「そこまでや。それで終わりや」

陽鞠「なんやのんそれ。ワンボールや」

寿道「ぼくはこんな体や。走ることでもできん。

体育の授業に出たこともない。見たやろ、

毎日たくさん葉飲んでる。いつまた手術せ

なあかんか分からん。そんな体なんや」

陽鞠「なんやそれ！ ポールツー！」

寿道「それがぼくや。これからずっとずっと

続くぼくなんや。そんなぼくが、これ以上

杉原さんになにを言えるのん」

陽鞠「ポールスリー！ キャッチャーも捕ら

れへんクソボールでフルカウントや！

言うたやろ、今わたしに思ってること言う

てって！ 今春野君がわたしに思ってる

こと！ いちばん思ってること！ それ

を聞きたいんやわたしは！」

顔を上げる寿道。

陽鞠「わたしに言わせるのん、それ！」

じつと見つめあう陽鞠と寿道。

寿道「——好きや」

陽鞠「なんて！ 聞こえん！ ファウルや！

もっと大きい声で言うてえや！ 恥ずか

しいん！」

寿道、深呼吸して。

寿道「好きや！ ぼくは杉原さんのことが好

きや！ 大好きや！」

陽鞠「ストライク！ バッターアウト！ 三

振や！」

カップル二組が二人に拍手をする。

○地下鉄御堂筋線・車両内

帰りの車両内。隣どうしに座っている陽鞠と寿道。固く繋がれたその手。

陽鞠「ごめんな」

寿道「え、なにが」

陽鞠「ばあばのことや。分かったことあるんやけど、それは二人だけの秘密やねん。そやからごめんな」

頷く寿道。

寿道「ぼくの名前な、今もいっしよに住んでるおじいちゃんがつけてくれたんや」

陽鞠「え」

寿道「寿道の寿の字には、長生きするって意味があるんや。生まれた時から心臓悪かったぼくのために、つけてくれた名前なんや」

陽鞠「いっしよやん」

寿道「『いっしよ』って？」

陽鞠「わたしの名前もな、じいじがつけてくれた名前なんよ。お陽さまの下で鞠ついて遊ぶような元気な子になるようになって」

寿道「そうなんや」

陽鞠「けどやあ、センス古ない？ 鞠つきやで」

寿道「気に行っていないのん」

陽鞠「めっちゃ気に入ってる」

笑いあう二人。

○ファミリーストラン・店内

ボックス席で向かい合って座っている陽鞠、凜香と彩美。

彩美「ほんまに、ほんまに春野君とつきあうん？」

陽鞠「ていうか、もう三日前からつきあってるし」

彩美「前田君のことは？」

陽鞠「明日、ちゃんと断る」

彩美「春野君、かあ」

陽鞠「おかしい、彩美？」

彩美「いや、おかしいとかは、べつに思わへんけど——」

凛香「わたしは賛成できひん」

凛香を見る陽鞠。

凛香「手繋いで終わりやないよ。キスして終わりやないよ。そこから先、春野君大丈夫なん？」

陽鞠「凛香」

凛香「走るのもできひん春野君が、陽鞠とセックスすることできるん？」

彩美「凛香、それは」

凛香「大事なことから訊いてるんや。そんなん陽鞠かて分かってるやんな。好きどうしになるって、結局そういうことなんやで」

俯く陽鞠。

凛香「無理や、春野君には。今からでも遅ない、やめとき」

彩美「なあ凛香、セックスって男の人、やっぱり、そんなに？」

凛香「佑志君はすごく優しくしてくれる。わたしはそんな気分にならへんときは、手握ってるだけのときもある。避妊も絶対してくれて、宝物触るみたいにして抱いてくれる。けど、最後の方はやっぱり激しくなる。最初はびっくりしたけど、今はその激しいのが嬉しくなってる。そやからわたし

も負けへんように、佑志君、力いっぱい抱きしめる。それで、いっしょに果てる。それがセックスやで、陽鞠」

陽鞠「――わたしが動いたらええんやろ」
彩美「最初から？」

頷く陽鞠。

凛香「あんたなあ、めっちゃ痛いんやで最初って。どこに初めての時自分から男リードする女がいてるんよ」

陽鞠「ここにいてる。春野君なあ、一歳のときから生きるか死ぬかの大手術六回も受けてきてるねん。六回目は成功率三十パーセントやってんで。めっちゃ怖かったはずやわ、思わへん？ そんなんに比べたらなんでもないわ」

アイスミルクティーのストローに口をつける陽鞠。

陽鞠をじつと見ていた凛香と彩美。やがて凛香、フツツと笑って。

凛香「分かった。もうなにも言わへん。春野君、一年の時いっしょのクラスやっただけ、ほんまに優しい子やなって思ってた」

陽鞠「凛香――ありがとう」

彩美「あー、なんなん。これでひとりなんわただけやんかー。わたしも彼氏ほしいー」

陽鞠「大丈夫やって、彩美やったら」

凛香「うんうん、すぐにできるでできる」

彩美「根拠がなーい、気持ちがおもってない」

笑う陽鞠と凛香。

凛香、陽鞠の頭に手をやり、髪を撫で始める。彩美も。

陽鞠「ちよっと、なにいよ」

凜香「撫でたなるねん、陽鞠のこの髪」

彩美「わたしもそうや」

陽鞠「もう、そんなに気安う触らんといて」

凜香「いや、気安う触りたい」

彩美「わたしも」

嬉しそうに二人にされるがままにな
っている陽鞠。

○朔ヶ原高校・体育館入口

立っている陽鞠。コートでは男子バス
ケットボール部が練習中。出てくる前
田。

陽鞠「ごめんな、練習中に」

前田「かまへんよ」

陽鞠「返事、待たせてごめん」

前田「うん、で？」

陽鞠「あんな、わたし前田君とはつきあえへ
ん」

前田「え——あの、なんで？」

陽鞠「好きな人ができてん。そんでもうつき
あつてる」

前田「ちよ、誰なん、それ」

陽鞠「同じクラスの春野寿道君や」

前田「へ？ 春野って、あの春野？」

陽鞠「そうや」

前田「体育の授業出られへん、あの春野？」

陽鞠「そうや」

前田「いやいやいやいや、冗談キツイで杉原
さん」

陽鞠「ななが冗談なん。ほんまや。わたしは
ついこの前から春野君とつきあつてる」

前田「マジで？」

陽鞠「マジや。明後日いつしよに二色の浜行くねんよ」

陽鞠をじっと見つめる前田。

前田「俺より春野選ぶわけ？ 俺、あんなガチの陰キャに負けたわけ？」

陽鞠「はい、言うた」

前田「え」

陽鞠「なんかそういう事言うような気がしてたわ。そしたらこれで」

立ち去ろうとする陽鞠。前田、その背に向かつて。

前田「なんやあ、たいした女やなかったんやなあ、おまえ」

陽鞠振り返って。

陽鞠「ふられたらいきなり『おまえ』かあ。心技体いう言葉、毎日千回書いてから寝ろ、おまえは」

去っていく陽鞠。

体育館の壁を激しく蹴り上げる前田。

○二色の浜海水浴場

海水浴客で賑わっている砂浜を並んで歩く陽鞠と寿道。寿道、肩にかけた大きなタオルを首前で軽く結ぶようにして、胸板を隠すようにしている。

× 砂浜にビニールシートを敷いて座つて

陽鞠「なあ、いつまで隠してるつもりなん、胸」

寿道「——うん」

タオルを外す寿道。胸にくつきり大きく残る三十センチほどの手術痕。

俯く寿道。手術痕を見つめる陽鞠。

寿道「ムカデ這ってるみたいやろ。恥ずかしい体や」

陽鞠「怒るで。そういうところは直してほしい」

寿道「え」

陽鞠「なにがムカデやのん。どこが恥ずかしいのん。戦ってきた人の体や。戦って戦って、それに勝ってきた人間の体や。わたしは、そう思う」

寿道「——ありがとう。もう言わんし、そんなこと思わんようにする」

陽鞠「うん——水着似合ってる？　かわいい？　めっちゃ時間かけて選らんでん」

寿道「よう似合ってる。かわいいで。それに」

陽鞠「それに？」
寿道「水着もやけど、杉原さんがかわいい」
じつと寿道を見る陽鞠。やがて後ろにバタツと上半身を倒す。

陽鞠「あー、もう、そういうところやねんなあ！　なんなんそれ！」

足をバタバタさせ、そのまま寿道の手を握る陽鞠。

陽鞠「ていうかな、いつまで『杉原さん』なわけよ」

寿道「けど杉原さんかてぼくのこと『春野君』って言うやん」

陽鞠「そうやけど——そしたら今日から下の名前前でいこか」

寿道「呼び捨てで？」

陽鞠「呼び捨てで」

空を見上げている陽鞠。海を見ている
寿道。

寿道「なあ」

陽鞠「なに」

寿道「向こうの方の波打ち際、あんまり人
てへん。行ってみいひんか——陽鞠」

陽鞠「うん、寿道」

体を起こす陽鞠。手を繋いだまま人の
少ない波打ち際まで歩いていく二人。

寿道「こんなやねんな、海の水って」

陽鞠「なあ、座ろうや」

頷く寿道。波打ち際に腰を降ろす二人。
寿道「あんな、すぎは——陽鞠」

陽鞠「なに」

寿道「卑下してるわけやないんやけど、ぼく
な、こんな体やろ。そやから——」

陽鞠「そやから——」

寿道「そやから、なに？」

寿道をじっと見つめ、手術痕に手を当
てる陽鞠。驚く寿道。ゆっくりとその
胸を撫で始める陽鞠。

寿道「あの、杉原さん」

陽鞠、寿道の耳元に口を寄せて囁く。
陽鞠「また『杉原さん』とか言うた」

胸への愛撫を続ける陽鞠。寿道が勃起
している事に気づく陽鞠。

陽鞠「勃ってますけど、春野君」

寿道「——そら、そんなんされたら、そうな
るわ」

声を上げて笑う陽鞠。

陽鞠「元気いっぱいやないの。どんとこい、や」

寿道「『どんとこい』なん？」

微笑んで頷く陽鞠。

陽鞠「まあでも、卒業してからにしよか。わたしもつきあうんなか初めてやし。ゆっくりいきたい。デート、いっぱいしようや」

仰向けに寝そべる陽鞠。

陽鞠「ほら、寿道も。気持ちええで」

寿道「うん」

寿道も仰向けに寝そべる。二人、手を繋ぐ。快晴の空を見上げる

陽鞠「きれいな空やわあ」

寿道、無言。寿道を見る陽鞠。寿道、泣いている。

陽鞠「なに泣いてるのん、勃ってるくせに」
寿道「うるさいわ……」

陽鞠、微笑んで空を見上げる。寿道、泣き続けている。波打ち際に寝転び、固く手を握り合っている二人。

○サマルカンド・店内

沖村が椅子に坐った佳也子の髪の毛の色を抜く作業をしている。ソファに座ってその様子を見ている陽鞠。

× 作業を終える沖村。

沖村「陽鞠ちゃんよりも……」

鮮やかな赤い髪に感嘆の声をあげる沖村。

陽鞠「これが、ばあばのほんまの髪やっつてんな」

鏡に映るバーガンデイの自身を見つめる佳也子。

佳也子「あの人の言うとおりやったなあ。また見せてあげることできひんかった」

陽鞠「え？」
佳也子、寂し気に笑う鏡に映る自分を見つめて。

(F・O)

○さくらキツチンスクール・事務所

黒電話の受話器を耳に当てている佳也子。

佳也子「うん、分かった。行くから」
沈痛な表情で受話器を置く佳也子。

○夢山ハイツ203号室(夜)

座卓の上に乗った大盛りの焼きそばを、グラスのビールを飲みながら旨そうに食べている順平。

佳也子「ごめん、今日時間なかったから、それしか作られへんかった」

順平「なに言うてんねん。これで十分や。うまいわ、ほんまに」

焼きそばを頬張る順平をしばらく見ている佳也子。

佳也子「ちよっと、出てくるから」
立ち上がる佳也子。

順平「へ？　こんな時間にどこにや？」
佳也子「香里と美幸に会う約束してるんよ」

順平「――ついていくわ」

佳也子「あかん」
順平「そやかておまえ」

佳也子「お願い、言うこときいて」
順平「いっしょに行くって」

立ち上がりかける順平。

佳也子「ついでにきたら別れる！ 本気や！」
そのままだけなくなる順平。
部屋を出ていく佳也子。

○公園（夜）

公園の片隅。向かい合っている佳也子
と香里、美幸。

香里「心配してるんやろ、わたしが警察に
あの男とあんたが関係あったこと話すの」
美幸「安心し。それ言うたら、わたしが
あいつの店に行ったことあるって言わな
あかんの。まあ事件のだいぶん前のことや
から、言うたところでたいしたことない思
うけど、変な噂の元になってもいややし。
警察にいろいろ訊かれるのこりごりやし。
二人で話して黙ってこって決めたんよ」

佳也子「香里、美幸……」

香里「気安う名前呼ばんといえや、なあ」
美幸「ほんまに。もうあんたとは友だちでも
なんでもない。それ言いに来たんや」

佳也子「……」

香里「新聞や雑誌読んで知ってるんやろ。わ
たしら全部脱がされてなあ、あいつの言う
順番通りブラもパンティも脱いでいつて
なあ、あいつの周りに座らされてん。『お
まえらは肉の盾や』いうてなあ」

美幸「なあ、なんであんたがあの日に来てへ
んかったん。あの男とセックスしたあんた
がなんであの日に来てへんかったん？」

わたしら不思議でならんのよ」

香里「あいつな、言うたんやで。『処女貫た女が居てた銀行やから、ゲンがええ思つてここ襲うことにしたんや』言うてな」

佳也子「そんな…」

香里「ほんまや。わたしらの肩抱きながら、わたしらだけに聞こえる声で言うたんや。今でも夢に出てくるわ」

美幸「よう聞き。あんたがああ男に抱かれてへんかったら、ああ男は他の銀行襲つてたんや。候補は他にもあつたつて言うてたかな。そしたらわたしらあんな目に遭わんでもすんだんや」

俯いて無言の佳也子。

○夢山ハイツ203号室（夜）

食べかけの焼きそばを前にじつとしている順平。立ち上がる。部屋を出ていく。

○公園（夜）

香里「佳也子、あんたの初めての男は、殺人犯の緑山勝次や」

美幸「警官二人と支店長の船曳さんと最初に防犯ベル鳴らした鈴木君を殺した緑山が、あんたの最初の男や。あんたが遊びで抱かれたなあ。そんでその遊びがああ事件のきっかけや」

佳也子「そんな、そんな…」

手で顔を覆い泣き出す佳也子。その場にうずくまる。

香里「辛いん？ けどなあ——わたしらはも

つと辛あて怖かったんや！」
佳也子を蹴り上げる香里。地面に転がる佳也子。

○街路（夜）

佳也子を探しながら駆けていく順平。

○公園（夜）

香里「どんな思いした思ってるのん！ あんたのせいや！ ぜんぶあんたのせいなんや！」

佳也子を蹴る香里。美幸、腰を降ろし、佳也子の髪の毛を掴み、顔を上げさせる。

美幸「あんた『きれいやなあ』ってこの髪撫でてもらって、体中ベタベタ触られて、あの男とセックスしたんやなあ。四人も殺したあの男となあ。気色悪う」

佳也子の頬を思い切り往復ビンタしてから、顔に唾をベツと吐く美幸。美幸、立ち上がると、佳也子の尻を思い切り蹴り上げる。何度も蹴る。

荒い息を吐いて美幸。
美幸「腹はやめといたる。優しいやろ——あんたは運のええ子なんやわ、きつと」

すすり泣く佳也子。
順平、公園の前を駆け抜けようとして、三人に気づく。

順平「佳也子っ！」
駆け寄る順平。

香里「あら、王子様の登場かあ」
美幸「そうやって男に縋って生きていくんよ、

この子は」

順平、腰を落とし佳也子の両肩に手をやり、二人を見る。

順平「なんでや。なんでこんなこと——友だちやろ」

美幸「はっ、笑わさんといてえや。こんな汚い女と友だちなわけないやんか。なあ、杉原さん、ええこと教えたるか。この女はなあ」

佳也子「やめてっ！」

美幸「やめへん。この女の最初の男はなあ、緑山勝次やねんで」

順平「えっ……」

香里「短大の時に彼氏いてて、それが初体験やっけ聞かされてるらしいやん。嘘や。あんなに騙されてるんよ」

佳也子「やめて、やめてえ……」

美幸「あの男のスカイラインの助手席乗って、最初はステーキハウス。ええ肉食べてええワイン飲んで、その後六甲山までドライブ。六甲山で綺麗な夜景見ながらキス。で、最後は神戸のラブホテル。そやんな佳也子。そこでパージン捧げたんやんなあ。四人殺してわたしら裸にして喜んでた犯罪者になあ。嬉し気に聞かされてるから全部知ってるねんよ」

佳也子の嗚咽、止まらない。

香里「杉原さん、佳也子のことこないにしたわたしらのこと、恨んでくれてええよ。今の話聞いてあんたがこの女のこと好きでい続けられるんやったらな」

去っていく香里と美幸。

順平「佳也子」

佳也子「そやから、そやから来んといてって言うたんや！」

顔を上げ順平を見る佳也子。

佳也子「別れよ、順平」

順平「え」

佳也子「全部ほんまなんや。あんたのこと騙してたんや。わたしの最初の男は緑山勝次なんや」

順平「佳也子」

佳也子「こんなんされて当たり前や。わたしがきっかけになったんやあの事件」

順平「そんなわけ——」

佳也子「そうなんや！ わたしがあの男に抱かれてへんかったら、あの事件は起きてへん！ 人四人も死んでへん！ 香里や美幸が酷い目に遭ったりもしてへん！ ぜんぶわたしのせいや！ フラフラ遊んで、あいつに抱かれたわたしのせいなんや！」

順平「——気づいてやれんかった。ごめんな」
佳也子の両肩を掴んだ手に力を込める順平。

順平「あの事件からこっち、おまえ様子がおかしかった。勤めてたところがあんなことになつて、友だちが酷い目に遭わされて、それがよっぽどシヨックなんやろな、くらいにしか思ってた。苦しかったんやな。気づいてやれへんでごめんな」

佳也子「順平……」

順平「やっぱりいっしょについて来てやってたらよかった。そしたら、土下座でもなんでもして、おまえの代わりに、俺のこと気

がすむまでどないにでもしてくれって言
えたのにな。ごめんやで。許してや」

優しく佳也子の髪を撫でる順平。

佳也子「あんた、どれだけアホやのん。わたし、あんな事件起こした男に抱かれてんので、あんな男が初めての男やねんで。あんたのこと、ずっと騙してたんやで」

順平「それがどないしたんや。おまえはそのときの自分の気持ちに正直やっただけやないか。もう自分の事、許したれ。な」

佳也子「聞かれたなかつた。順平に知られたあなかつた……」

順平「俺は、知れてよかつたって思ってる。そやなかつたら、これからおまえひとり、苦しい思いさせて生きていかせなあかんかつた。そやろ」

佳也子「順平、順平……」

順平「うん、うん。もうなんも言いな」

佳也子「わたし、この赤い髪嫌いや。大嫌いや——染める。明日美容院行って黒に染めてくる。髪染め買って自分でも染めるようにする。もうこの髪で生きていきたくない」
順平「うん。おまえがそないに思うんやったら、そないにしたらええ」

泣きじゃくる佳也子。

順平「ほら、いつまでも泣いてんと。どっこも痛いところないか」

佳也子を立ち上がらせる順平。

佳也子「恨まんといて。お願いやから香里と美幸のこと恨んだりせんといて」

順平「うん、うん。分かつてる——よう汚れてしもうたなあ。帰って風呂屋行こな」

佳也子の服についた砂を払う順平。佳也子、泣き続けている。
順平「俺も頑張つて、風呂のある一戸建てくらい買えるようにならんとなあ」
二人、身を寄せ合つて歩き出す。

○路上（夜）

並んで歩いている二人。グズグズ泣き続ける佳也子の肩を抱き、引き寄せる順平。

順平「そやけどな、佳也子。髪、黒に染めたかてな、またいつかな、神さんからの授かりものみたいなのきれいな赤い髪に戻したいって思う日がくるはずやわ」

佳也子「来いひん。そんな日、絶対来いひん」

順平「いやあ、来るような気がするなあ。そのときはいちばん最初に見せてや」

佳也子「来いひんねん、そんな日は……」

順平「佳也子！」

佳也子「なによ」

順平「明日つからほんまに二人で生きていくぞ！ ええな！ 俺をそんな器のこんな男や思ふなよ！ なんでもかんでもどんとこいや！」

佳也子「プロポーズなん、それ？」

順平「あかんか？ うちの社長、仲人、記念

の十組目になるんやつてよ」

佳也子「どんなタイミングでしてくれてんのよ、あんたほんまにアホやわ……」

順平「アホアホ言いな」
寄り添って歩いていく二人の後ろ姿。それが闇に消えていって。

○
メ
イ
ン
タ
イ
ト
ル
へ
恩
寵
の
バ
ー
ガ
ン
デ
イ
〜

(
了
)